

時代に合ったホンモノを目指して。 豊かさ・住みやすさの追求も。

「二十十年ほどはキビしい。それまではコメも野菜も作れば売れた。今はニーズに合ったいいものを作らないと売れない」。異口同音にこんな風に訴える農家は多い。六十年代にバブル景気が始まり、平成に入ってから崩壊した。農産物の自由化もどつと押し寄せ、作れば売れる時代は終わり、以降、売れるものをいかに作るかが最重要テーマである。

しかし、この「売れるもの」の中にはとつともなくたくさんのキーワードが隠れ、その姿を見つければ容易ではない。「安全・安心」だったり、「エコロジー」や「癒し」「なごみ」「スロー」など、さまざまなニーズが眠る。それだけ消費者の価値観は多様化、個性化、複雑化してきている。

平成十三年にオープンした「産直おすず村」には、地域で取れる農林水産物をその地域で消費する豊かさがあふれている。いわゆる「産地消費」の産物が並ぶ。固定客も多く、生産者が身近に感じられ、安心できると

評判。化学肥料や農薬を減らし、

県から認定を受けて取り組む「エコファーマー」も、

川南は県下で有数の規模を誇る。いち早く取り組んだところは、川

南らしい進取の精神に溢れている。よう。「鈴マロン」や「尾鈴イチゴ」

など、農産物のブランド化も進められている。と

ころで、昭和六十一年には、第一回目の「サ・フェスティバル・イン・トロンロン」が開催されている。若者たちの町を楽しくしよう、というほどはしるエネルギーは、十分フロンティア精神に富んでいる。



通浜に住むある夫婦は、ちよつとした有名人。ひょうたんを使った笛やマラカスやカリンバをいっしょに作ったり、演奏したりする。平成九年に東京からやってきた。「アジアに近い九州を活動の場にしたい」として川南を選んだだけど、暖たかくて本当に住みやすい。この時間や空気の流れが自分に合っている。現在、各種の生涯学習にも携わっている。

このように、平成の移住者は川南に田舎暮らしを求め、住みやすい生活環境を期待している。もちろん、潤いのある暮らしを実現したいのは誰しも同じだ。八幡原で酪農を営む開拓二世はこう話す。「搾乳にパイプラインミルカー

を入れて、作業時間が三割は減ったかな。あと酪農ヘルパーも利用しますから、昔に比べる」と随分楽になりましたよ。開拓の歴史とともに農業を中心に発展してきた川南も、六十年代に入り、さらに機械化が進み、交通網が整い、労働の支援体制もできてくると、余暇時間が増えてきた。トロンロンや川南温泉など生活環境の整備もかなり進んだ。

この二十一世紀は、きつと一人ひとりが生きがいを大切に、本物の豊かさを切り開く。開拓者」として、ニューフロンティア精神を育んでいくに違いない。



平成五年には伊倉浜サーフィンセンターが完成した。サーフィン大会が何度か開かれ、サーファーも全国から訪れた。その中には川南を気に入り、住み着いた若者も少なくない。以前とは

は違った新しいタイプの移住者たちである。

平成九年に静岡県熱海市から伊倉地区に引っ越してきた夫婦は、定年退職後の田舎暮らしを満喫している。「海が見えるように展望台を作ったり、ちよこつと畑をやったり、釣り

もしい、仲間たちとしゃべったりワイワイやっていますね。ここは気候が温暖で、山あり、海あり。JRの駅が近いのも嬉しい。平成元年に横浜から東海地区に転居してきた夫婦も「なるべくイヤなことは避け、やりたいことをするようにしている。四半的をやったり、妻は三味線や民謡やちぎり絵など、まあ、ノンビリと」と、地域とゆるやかに関わりながら暮らしている。



このように、平成の移住者は川南に田舎暮らしを求め、住みやすい生活環境を期待している。もちろん、潤いのある暮らしを実現したいのは誰しも同じだ。八幡原で酪農を営む開拓二世はこう話す。「搾乳にパイプラインミルカー

を入れて、作業時間が三割は減ったかな。あと酪農ヘルパーも利用しますから、昔に比べる」と随分楽になりましたよ。開拓の歴史とともに農業を中心に発展してきた川南も、六十年代に入り、さらに機械化が進み、交通網が整い、労働の支援体制もできてくると、余暇時間が増えてきた。トロンロンや川南温泉など生活環境の整備もかなり進んだ。

この二十一世紀は、きつと一人ひとりが生きがいを大切に、本物の豊かさを切り開く。開拓者」として、ニューフロンティア精神を育んでいくに違いない。